

## 言語類型論からみた上代日本語の主語表示・目的語表示

### —「ガ」と「ヲ」と「ゼロ」表示について—

柳田優子

#### 1 はじめに

現在まで、日本語史の研究は、日本語の枠内だけで捉える研究が主流である。しかし、言語類型論の観点から日本語史をみていくと、世界の多くの言語に共通する現象があることが見えてくる。また、そうした観点から文法の記述を行うことにより、今まで日本語の枠内だけでは、見えなかった言語の一般性に関わる現象が、日本語の歴史資料をとおして、見えてくることがある。本論考では、上代日本語（8世紀頃）の主語・目的語を表示する格助詞を取り上げ、言語類型論の視点から日本語の「格」と語順の問題を考察する。

格や語順を歴史資料から検証する上で、データの文字列に対して構造分析を行うことは、非常に重要である。自然言語は単に文字の羅列ではなく、主節、従属節といった構造を持っている。たとえば、「赤駒が門出をしつつ出でかてにせし(万葉集 3534)」を例にとると、文字列だけを見れば、主語と目的語がガ>ヲという語順で並んでいるように見える。しかし、構造的には、「赤駒が」は、埋め込まれた「しつつ」節の主語位置ではなく、上位連体節「出でかてにせし」の主語位置にあり、「しつつ」節内は音形のない代名詞(**pro**)が、「赤駒」を先行詞にとる— [赤駒が [ **pro** 門出をしつつ] 出でかてにせし]-のように分析される。格の観点から、この文のガ句を「しつつ」節内の主語と言うことはできないし、また語順の観点から2つの項は同一節内にないので、ガ>ヲ語順とも言えないのである。英語史の分野では、こうした統語構造を検出できる通時コーパス (Penn-Helsinki Parsed Corpus of Old and Middle English)が考案され、英語史の統語研究を飛躍的に発展させた。現在、オックスフォード大学で、上代日本語資料に文法標識(統語標識・品詞タグ)を付加した通時コーパス『オックスフォード上代日本語コーパス』(Oxford Corpus of Old Japanese 以下、OCOJ)が開発され、いくつかの文法現象に関しては、試験的に運用されている(注1)。格と語順に関する本研究は、上代の和歌、散文資料の広範な調査に基づいているが、特に、万葉集データは山口大学の「万葉集検索システム」、また祝詞、宣命の調査は Oxford

Corpus of Old Japanese を使用した。

## 2 格配列

格とは、言語の性質の根本をなすもので、言語類型的に3つのタイプに分類できる。まず、自動詞の主語を S、他動詞の主語を A、目的語を O と表す。主格・対格型は S, A を主格、O を対格で表示する。現代日本語は疑いなく主格・対格型である。主語と目的語は名詞や動詞の意味に関わらず、それぞれ「ガ」「ヲ」で表示される。

- (1) 桜の花=が 咲いている。  
太郎さん=が ビール=を 飲んだ。

### (2) 現代日本語の格配列

|     |    |    |
|-----|----|----|
|     | 主格 | 対格 |
| 他動詞 | ガ  | ヲ  |
| 自動詞 | ガ  |    |

主格・対格型の他に「能格型」と「活格型」と呼ばれる格配列をもつ言語が存在する。主格・対格型を、一般に「対格型」と呼ぶのに対し、能格型と活格型を「非対格型」と呼ぶことがある。また、非対格型言語の主語表示は、動詞や名詞の意味により異なるので、Differential Subject Marking (de Hoop 2009 参照) (以下、「示差的主語表示」とも呼ばれる。

非対格型では、自動詞主語 S と目的語 O は、同一表示「絶対格」(一般的にゼロ格)で表示され、他動詞主語 A と区別される。他動詞主語 A は能格あるいは活格で表示される。能格は他動詞主語 A を表示する形態格であり、活格は、「動作主」(agent)を表示する格である。一般には、動作自動詞と他動詞の主語は同一表示の活格、非動作自動詞の主語と他動詞の目的語は同一表示の絶対格で表れる。活格型は分裂自動詞をもつ能格型とみなし、活格と能格を区別しない研究者もいる。さらに、非対格型言語の中で、名詞の性質で分裂する言語の格の「有標性」が、Silverstein(1976)の名詞階層(3)に従うことが観察される。Dixon(1994)によれば、名詞階層は名詞の動作主性(Agency)を反映する。

### (3) 名詞階層 (Silverstein 1976)

代名詞 > 固有名詞 > 普通名詞  
一人称 > 二人称 > 三人称、人間 > 有生物 > 無生物

分裂能格(split ergative)言語では、名詞階層のある地点で能格が現れれば、それより低い名詞は能格で表示され、それより高い名詞は対格型をとる。たとえば、ジリバル語では代名詞は対格型、普通名詞は能格型配列をもつ分裂能格言語である。一方、名

詞階層で分裂する活格言語では（グアラニ語、ラコタ語など）階層の高い一人称、二人称代名詞は活格表示され、三人称、普通名詞は絶対格（一般にゼロ格）で表示される。こうした事実から Yanagida and Whitman(2009)では活格言語の階層性を以下のように定義している。

#### (4) 活格の階層性 (Yanagida and Whitman 2009)

名詞階層のある点で活格が現れる言語はそれより高い階層は活格表示される。

非対格型言語の格の分裂は、動詞や名詞の意味、話者の意図など、さまざまな要因が関係し、多様性を持つことが知られている。また、多くの研究により、格配列は歴史的に対格型から非対格型、非対格型から対格型へと変化することが観察されている (Harris and Campbell 1995 参照)。

### 3 従属節内の格配列

#### [1] 上代日本語の主語表示

すでに話者がいない8世紀の日本語の性質を理解しようとするとき、我々は現代語の延長線上で捉えがちである。たとえば、伝統文法では、一般に現代語の主格ガは、上代語でも主格と捉えられている。しかし、上代語のガは終止形動詞の主語を表示しない。終止形動詞は一般に他動詞主語も自動詞主語も無表示であり、上代語の主格は、ゼロ表示である。

#### (5) 上代日本語の終止形動詞の格配列

|     | 主格 | 対格 |
|-----|----|----|
| 他動詞 | ゼロ | ヲ  |
| 自動詞 | ゼロ |    |

一方、上代語は連体節をふくめて広い範囲の従属節内で、主語はガ格、ノ格、ゼロ格の3つの格表示の可能性がある。伝統古典文法では、主語表示のノとガに焦点をあてる研究が多いが、(野村1993など)本稿ではガ格とゼロ格の対比に焦点をあてて論じる（ただし文頭で主題(トピック)を意味する無表示主語は除く）。

#### [2] ガとゼロ

現代語では、一般にゼロ表示の項は、会話文などに現れ、文体的な格脱落(case drop)と捉えられている。

(6) 庭の桜 Ø 咲いたよ。

こうした現代語の延長線上で、上代語でも、ゼロ表示は、単に文体的な格の脱落と考えられ、あまり研究の対象にされてこなかった。しかし、上代日本語の無表示の項を現代語の延長線上でとらえるのは根本的に間違っている。第一に、現代語の格脱落は、従属節内では起こらない。

(7) \*ぼくは、[庭の桜 Ø 咲いたの]を見た。

文体的格脱落は(7)では非文である。しかし、上代語の連体節内の無生物主語の多くは、(8-9)で示すように、ゼロ表示である。

(8) 夕さらず河蝦 Ø 鳴く瀬 (356)

(9) 泊瀬の山は真木 Ø 立つ荒山道 (45)

ここで、(8-9)の無表示主語は、随意的なノ格の脱落ではないかという疑問が生じるかもしれない。なぜなら、ノ格とゼロ格は名詞階層においてはどちらも階層の低い名詞を表示し、類似した分布を示すからである。しかし、動詞に焦点をあてるとノ格とゼロ格は異なる分布を示す。従属節内の他動詞主語はノ格で表示され、ゼロ格では表示されない。さらに、ゼロ格主語は動詞に隣接して現れるが、ノ格はそうした制限はない、など統語的にも大きく異なることが観察され、ノとゼロ格の交代が単に随意的格脱落とは捉えにくい。(本稿ではノ格について議論するスペースはないが、詳しくは Yanagida and Whitman (2009)を参照されたい。) (8-9)の無表示主語は、格が脱落したのではなく、上代語では、名詞階層の低い名詞はゼロ格で表示されると捉えるのが妥当である。ガ格主語とゼロ格主語の分布は、(3)に示した Silverstein の名詞階層に従う。(10-11)で示すように、名詞階層の高い人称代名詞と話者(一人称)に近い人間名詞は「ガ」が義務的であり、また、ガ格主語は他動詞、動作自動詞と共起するが、ゼロ格主語は、従属節内では非動作自動詞と共起し、他動詞、動作自動詞とは共起しない。

(10) 我が背子が(我)浜行く風 (2459)

(11) 君をあが(安我)待たなくに (3960)

以上をまとめると、上代語は、主語が名詞あるいは動詞の意味によって、格が交代する「示差的主語表示」(DSM)をもつ言語である。終止形主文は主格・対格型、従属節(連体節など)は活格型配列をもつ(注 2)。

## (12) 従属節内

活格＝ガ、絶対格＝ゼロ

「ガ」は、属格・活格融合形 (genitive-active syncretism) であり、名詞句内の所有者と従属節内の主語を表示する。こうした上代日本語の特徴は、非対格型配列が名詞化 (nominalization) に由来する言語に共通する性質である。能格・活格配列が通時的に名詞化に由来する言語では、共時的には属格が能格 (あるいは活格) と同形の言語が多く存在する。(マヤ語、イヌイット語など) また、Dixon(1994)によれば、主文と従属節で異なる格配列をもつ言語では、上代語でみたように、主文は対格型、従属節は非対格型をもつのが一般的である。

## 4 目的語表示

### [1] フとゼロ

主語の分裂格配列をもつ言語では、目的語に対しても2つの異なる Differential Object Marking (以下では「示差的目的語表示」と呼ぶ)をもつ言語が多くある。一般に、有標性は主語と同様に名詞階層を反映する。たとえば、能格型のジリバル語も活格型のヒンズー語も「示差的目的語表示(DOM)」をもつ。ヒンズー語は活格型言語であるが、名詞階層上位の有生名詞(13)は形態的対格(-ko)が義務的であり、下位の無生名詞(14)では、不特定名詞はゼロ格表示、特定名詞には対格が現れる。

(13) ilaa-ne bacce \*(-ko) ut<sup>h</sup>aayaa.

Ila-Erg child (-Acc) lift-Perf

‘Ila lifted the/a child.’

(14) ilaa-ne haar(-ko) ut<sup>h</sup>aayaa.

Ila-Erg necklace(-Acc) lift-Perf

‘Ila lifted the/a necklace.’

(Mohanana (1994:80)から引用)

上代日本語でも階層の高い代名詞「われ」「きみ」はフを義務的に取る(表1)。

表1

|    | 目的語 |     |
|----|-----|-----|
|    | 無助詞 | フ   |
| われ | 1   | 44  |
| なれ | 0   | 18  |
| きみ | 20  | 116 |

(データは「万葉集検索システム」による)

上代語の格を見る上で、問題となるのは、その資料のほとんどが、和歌であることである。そこで、格助詞の有無は、和歌の韻律制限によるものではないかという疑念が生じる(金水 2011)。しかし、万葉集などの膨大な資料からある一定の文法的パターンが見られるとき、それを韻律制限だけで説明することはできない。表1の代名詞が無助詞の21例はすべて動詞「待つ」に隣接されている。和歌の韻律を考えると「君を待つ」と格助詞で表示されてもよさそうであるが、格助詞で表示される例は2例のみである。「君待つ」はおそらく慣用的に使われ例外と捉えてよいだろう。

Motohashi (1989)は、上代語の「ヲ」は現代語と異なり、「定性(definiteness)」の意味をもつと提案した。定性とは、発話前の文脈に指示対象が存在し、対象が限定される場合をいう。英語では定性、不定性を冠詞 the/a で区別する。しかし、Yanagida and Whitman (2009)では疑問詞がヲ格で表示される例があるため、ヲは「特定性(specificity)」を示すと提案した。特定性に関しては研究者の間でも定義のコンセンサスがまだ見られない。本稿では Yanagida and Whitman(2009)に従い、話者が具体的指示対象、あるいはその対象を含む集合を同定しているか否かで特定の非特定のかを区別する。

(15) 奥山の真木の板戸を押し開きしゑや出で来ね後は何 Ø せむ (2519)

(16) 潮干なば玉藻刈りつめ家の妹が浜づと乞はば何を(矣)示さむ (360)

(15)では話者は「何」の答えの候補を持っていないが、(16)は「何」の答えの候補は「浜の贈り物」の集合を指している。後者を Pesetsky (1978)は、談話に連結された Wh 要素「D-link された wh 句」と呼び、格助詞は D-linked された疑問詞を表示する。上代語の「ヲ」が特定性を示すという仮説は、Frellesvig, Horn and Yanagida (2014)で Oxford Corpus of Old Japanese を使用して大規模に検証を行っている。(17-18)は Frellesvig, Horn and Yanagida(2014)から引用した。

(17) 泊瀬の川の上つ瀬に 鶺鴒を(矣)八つ潜け 下つ瀬に  
鶺鴒を(矣)八つ潜け (3330)

(18) 辟田川 鶺鴒 Ø 八つ潜けて川瀬尋ねむ(4158)

数量詞には2種類の意味があり、その意味によりヲで表示される場合と無助詞の場合がある。(17)は、存在する特定の集合(上つ瀬の鶺鴒、下つ瀬の鶺鴒)の部分を示す解釈(特定解釈)であり、(18)は、そのような集合の存在が想定されない非前提的解釈(非特定解釈)である。

## [2] 語順

日本語は SOV 言語であるが、上代語には特異な語順の制約がある。主語と目的語が格助詞で表示される場合、ノ格主語はヲ格目的語にたいして、左にも右にも表れるが、ガ格主語がヲ格目的語と同一節内に表れるときは、ヲ>ガの語順で表れる。(柳田(2007)の万葉集全例の調査に基づく。(20)のような同一文は一例として数えた。)

### [ノ>ヲ] 8 例

- (19) 春雨の(乃) 避くれどわれを(乎)濡らす (1697)  
(20) そこもか人の(之)吾を(乎)言なさむ (512, 1329, 1376)

### [ヲ>ノ] 6 例

- (21) つぎねふ山城道を(乎)他夫の(乃)馬より行くに(3314)  
(22) 春雨の情を(乎)人の(之)知らずあらくに(1916)

### [ヲ>ガ] 39 例

- (23) 秋山を(乎)いかにか君が(之)独り越ゆらむ (106)  
(24) 吾が手を(乎)今夜もか(毛可) 殿の若子が(我)取りて嘆かむ (3459)

上代日本語資料で、明らかに同一文にあるガ>ヲの例は、山上臣憶良が詠んだとされる(25)の一例だけである。

### [ガ>ヲ] 1 例

- (25) 佐用姫が(何)この山の上に領巾を(遠)振りけむ (872)

万葉集 872 の前後に「領巾振る」という表現が 5 例あるが、872 だけヲ(遠)で表示されている。(25)のヲは、名詞「緒」が格助詞ヲの「縁語」として使われている可能性もある。いずれにしても、ヲ格目的語は構造的にガ格主語より高い位置で認可される。このヲ>ガ語順の制約は、言語類型論や生成文法理論の視点から分析すると、上代語に特異のものではないことが見えてくる。生成文法の格理論の枠組では、(26)に示すように、構造格である主格は、一般に動詞や名詞の意味とは無関係であり、主格主語は小動詞句内(vP)(動詞句(VP)を直接支配する機能範疇)の主語元位置から、機能範疇 TP の指定部(Spec)へ移動する。

- (26) [TP 主語<sub>i</sub> [vP t<sub>i</sub> [VP 目的語 動詞 ]]] (SOV 型)

一方、Woolford(1997)以来、能格・活格は動作主に与えられる「内在格(inherent case)」であるという主張が一般に受け入れられている。内在格は意味的な格であり、統語的には小動詞句(vP)内の主語元位置で認可され、主語は構造上移動する必要がない。そ

のため、(27)に示すように、主語が動詞に隣接する OSV 語順をもつ言語は非対格型言語に多い。

(27) [TP 目的語<sub>i</sub> [VP 主語 [VP t<sub>i</sub> 動詞 ]]] (OSV 型)

たとえば、ジリバル語は分裂能格言語であるが、対格型は SOV、能格型は OSV 語順で表れる。

(28) ngana nguma bura-n (対格型 SOV)

we-Nom father-Abs see-Nonfut

‘We saw father.’

(29) nguma yabu-nggu bura-n (能格型 OSV)

father-Abs mother-Erg see-Nonfut

‘Mother saw father.’

(30) ngana-na nguma-nggu bura-n (能格型 OSV)

we-Acc father-Erg see-Nonfut

‘Father saw us.’

(Dixon 1994:13, 161 から引用)

上代日本語のガ格が活格であるという仮説は、「ガ」格が動詞に隣接して小動詞句内の元位置から移動しないことによって裏付けられる。すなわち生成文法理論の枠組みでは、上代語の例(23-24)はジリバル語(30)と同じ構造を持つと考えられる。

以上、主語と目的語の形態格について見て来た。次に無助詞目的語について述べる。

### [3] 無助詞目的語と名詞抱合

ヲ格目的語は、統語的にはガ格主語の前に移動することを述べたが、ゼロ格目的語は常に動詞に隣接する。しかし、主語が明示的でない場合は、隣接したゼロ格目的語が文頭で主題(トピック)を意味する場合もある。統語的に動詞句内の目的語元位置にあると言えるのは、主語に後続する場合である。万葉集には 92 例ある。

[ガ>ゼロ] 35 例, [ノ>ゼロ] 57 例

(31) 佐用比売の子が(何) [VP 領巾 Ø 振りし] 山の名 (868)

(32) 今日もかも大宮人の(之) [VP 玉藻 Ø 刈る] らむ (41)

主語に後続する目的語は、(31-32)のように、動詞に直接隣接し、1 語であり (92 例中 86 例が 1 語)、意味的には、指示対象が具体的に同定されていない不特定名詞である(柳田 2007 付録参照)。これは、名詞が動詞と結びつき単一の動詞を派生させる、



いわゆる「名詞抱合(noun incorporation, Baker1988 参照)」とよばれる現象が上代語に存在したことを強く示唆する。(31-32)では目的語「領巾」と「玉藻」がそれぞれ、動詞と統語的に結びつき、単一の動詞「領巾振る」「玉藻刈る」を派生させる。名詞抱合は示差的目的語表示をもつヒンズー語やトルコ語など多くの言語にみられる現象であり、動詞に抱合される名詞は一般的に不特定名詞に限られる。(トルコ語の名詞抱合は Kornfilt (2003), ヒンズー語の名詞抱合は Mohanan (1990)参照)。上代語に名詞抱合が存在する根拠は、軽動詞「する」に隣接する動作名詞は常に無表示で、現代語のように「ヲ」で表示される例は一例もない。

(33) [漁り Ø する]海人の燈火沖になづさふ (3623)

(34) ひぐらしの鳴く島蔭に[廬り Ø する]かも (3620)

以上をまとめると、上代語は「特定性」により2つの示差的目的語表示をもつ言語である。ヲ格は特定名詞を表示し、統語的には、動詞句の外へ移動する。動詞に隣接する不特定名詞は、動詞と結合し、単一の動詞を派生する。上代日本語では、こうした統語的な名詞抱合が生産的に使われていたと考えられる。

## 5 宣命と祝詞

本節では、上代の散文資料である宣命と祝詞の「ヲ」格目的語とゼロ格目的語の違いにも、「特定性」が関与していることを述べる。Wrona and Frellesvig (2010)は、この2つの散文資料の目的語の「ヲ」格と無表示について調査を行っており、無表示目的語は格助詞が随意的に脱落した文体的違いであると主張している。しかし、Wrona and Frellesvig の分析の問題は、ヲ格が宣命体で表記されていない例をすべて無助詞(ゼロ格)目的語として分析している点である。宣命体で書かれた上代の散文資料の大きな問題点は、格助詞や活用などは宣命体で書かれているが、多くは、表記されないうで、音読の際に「読み添え」られる。宣命の研究は、江戸後期の本居宣長の注釈書が一番古いものであるが、池田(1996)の調査では、本居の注釈書には、83の「ヲ」の読み添えがあり、Wrona and Frellesvig が使用した、北川(1982)の注釈書では「ヲ」の読み添えが85ある。しかし、本居も北川も読み添えの根拠を示していない。北川の読み添えは本居に数が近似しているため、おそらく本居に従ったものと思われる。重要な点は、読み添えられた「ヲ」は当時の日本語を反映しているとは限らないということである。また、無表記の目的語が無助詞(ゼロ格)目的語を意味するものでもない。

宣命体で表記されたヲ格と無表記目的語の分布は Wrona and Frellesvig (2010)と極めて近い数が得られた(括弧内は W&F)。

表2

| ヲ格目的語     |          | 無表記目的語   |          |
|-----------|----------|----------|----------|
| 宣命        | 祝詞       | 宣命       | 祝詞       |
| 498 (494) | 261(260) | 256(251) | 166(173) |

(データは北川(1982)、倉野、武田(1958)による)

表2の無表記目的語は原文で宣命体の「ヲ」で表記されていない目的語の数である。「ヲ」格が特定性を示すかどうかは、宣命体で表記された「ヲ」格目的語を調べる必要がある。OCOJを使用して目的語を調査した結果、たとえば、人称代名詞の吾、汝、朕などは、すべて宣命体ヲで表記されている。祝詞には「種種／品品／雑(くさぐさ)」という表現が数多くでてくる。くさぐさ+名詞は、特定のものをさす場合にヲ格で表示され、不特定のものは、ヲ格で表示されない。

- (35) 御馬に御鞍具えて、品品の幣帛 Ø 備へて、(竜田風神祭)  
 (36) 青海の原の物は、鱈の廣物、鱈の狭物、奥つ藻、邊つ藻采に至るまで、雑の物を(乎)横山のごとく (平野祭)

次田(2008)の現代語訳によれば、(35)は将来の幣帛をさし、不特定の意味であるし、(36)は「至るまで」とあるように明らかに「くさぐさのもの」は、前に列挙した物を指す。次に、(37)をみしてみる。

- (37) 御年の前に、白き馬、白き猪、白き鶏、種種の色物を(乎)  
 備へまつりて、(祈年祭)

次田は(37)の「種種の色物」が何を指しているか2つの説があると述べている。色物は前に列挙したものを指しているという賀茂真淵説、前のものではなく、将来の祈年の幣帛をあらかじめ言っているという鈴木重胤説である。前者は特定解釈で、後者は不特定解釈である。次田は後者を支持しているが、こうしたあいまい表現はヲ格が特定性を表すという仮説に従えば、真淵説が正しいということになる。

次に宣命体無表記の目的語をみしてみる。祝詞は(38-39)で示すように無表記目的語の分布は万葉集とほとんど同じである。動詞に隣接した動詞句(VP)内の無表示目的語は一語に限られ、すべて不特定性を示す。

- (38) 皇御孫命の[<sub>VP</sub> 大嘗 Ø 聞し食さむ]為の故に (大嘗祭)  
 (39) [<sub>VP</sub> 領巾 Ø 懸くる]伴の緒、[<sub>VP</sub> 襖 Ø 懸くる]伴緒 (大殿祭)

「大八嶋國」(日本国)は、祝詞、宣命に多く現れ、(40)のように、動詞に隣接すると、

例外なく、「知」(治める)という動詞と用いられ、ゼロ表示で現れる。一方、隣接しない(41)の場合は、ヲが表れる。

(40) 志貴嶋に[<sub>VP</sub> 大八嶋國 Ø 知らしし]皇御孫命 (竜田風神祭)

(41) 明つ御神の大八嶋國を(乎)...平らけく知ろしめさむ事 (儼祭詞)

すでに述べたように、特定名詞でも、常に、同じ動詞と用いられるものは、慣用的に使われ、名詞抱合していると考えてよいだろう。祝詞には、名詞句が動詞に隣接した場合、抱合が主要部名詞と動詞の間で起こる例がいくつかある(関係節や所有格名詞の主要部が動詞に抱合する言語については Baker(1988:92-96)参照)。(42-43)は、所有格名詞がヲ格目的語位置に繰り上げられ、主要部名詞が動詞に抱合されている例である。

(42) 大木・小木を(乎) [<sub>VP</sub> 本末 Ø うち切り] (六月月次)

(43) 大船を(乎) [<sub>VP</sub> 舳 Ø 解き放ち] (六月晦大祓)

興味深いのは調査をとおして、宣命体で表示されたヲ格目的語は宣命と祝詞は同様のふるまいをするが、無表記の目的語は、宣命は祝詞とは大きく異なることが観察されることである。宣命には、無表記の目的語が特定性・定性を示すものは数多くある。(44-45)は明らかに特定解釈であり、意味的にも統語的にも名詞抱合するとは言えない。

(44) [祖父大臣の殿門]Ø 荒し穢す事無く (宣命 13 詔)

(45) [王たち大臣の子等]Ø 治賜ふいし天皇が朝に仕へ奉り (宣命 13 詔)

この無表記目的語に関する宣命と祝詞の違いをどのように解釈すればよいかという点に関して、小谷(1986)の祝詞と宣命の違いに関する考察がたいへん参考になる。以下、小谷から抜粋した。

「宣命はそれを漢文化すると詔勅になる、あるいは詔勅を和文化すると宣命になるというふうに、宣命と詔勅は類縁関係をなしている。ところが、祝詞は漢文化することも、祝詞の元になった漢文を想定することも多くの場合は困難である。つまり、宣命と祝詞は文章の起源を異にしていたと考えねばなるまい。祝詞の文章の起源は、口承伝統を受けたものと考えべきであろう。その文字化は和歌の場合と同様に、そのまま和文として読み上げられるように表記したものが始まりであったであろう。(小谷 1986:124 頁)」

つまり、宣命は文章の骨格を漢文に依存し、漢文を土台に成立したものである(小谷 1986:125 頁)。漢文を土台にしている宣命では、助詞や活用形など、日本語独自の機

能語の多くは、文字化されず、口読の際に読み添えられた可能性が高い。一方、祝詞と万葉集の無助詞目的語の分布が似ているのは、どちらもその土台が和文であるためである。そのように考えると(44-45)の宣命の特定性を示す無表示目的語は、実際は、「ヲ」で読み添えられたと考えるのが自然である。

現代日本語では「ガ」と「ヲ」は動詞また名詞の意味に関わりなく主語と目的語をそれぞれ表示する構造格である。しかし、上代日本語は、格助詞が動詞また名詞の意味に関係し、それに対応するゼロ格表示の項と区別される、いわゆる「示差的項表示」をもつ言語である。こうした示差的項表示は上代以降にはすでに消失したと考えられるが、「ガ」が内在格である活格から、構造格としての主格へどのように変化したかは、上代以降の資料の調査が必要であり、今後の課題である。

## 6 コーパス化の今後

日本語は世界的にみても歴史資料のもっとも豊富な言語のひとつであり、日本語史の研究の果たす言語学的意義は非常に大きい。しかし、古典日本語文法は現在まで、日本語の枠内で文法を記述する研究が主流である。より一般性の高い言語学的視点から通言語的研究を行うためには、膨大な歴史資料から仮説をたて、質的、量的に仮説の妥当性を検証するための統語情報を検出できる通時コーパスの構築が必須である。

### 注

1 Oxford Corpus of Old Japanese(OCOJ)は、現在、無助詞の項に関してタグ付けを行っているが、本論文執筆時までには完成されておらず、OCOJ からデータを検出することができなかった。

2 上代日本語が活格型であるとはじめて提案したのは、Vovin (1997)である。しかし、Vovin は上代日本語の主語標示の「イ」を活格、「ヲ」を絶対格と捉えている。竹内(2008)の主張も Vovin (1997)に従ったものである。しかし「ヲ」が主語の非動作主語を表示する例は、いわゆる「ヲ+ミ」語法に限られる。Vovin や竹内があげているそれ以外の例は、ほとんどが、ヲが隣接する動詞の主語位置にあるのではなく、構造上より高い動詞の目的語の位置にあると分析される。例えば、竹内があげた例(i)を参照されたい。

(i) 道の後古波陀嬢子を<sub>i</sub> [pro<sub>i</sub> 神の如聞えしかども] 相枕まく (古事記歌謡 45)

竹内によれば「聞ゆ」は項をひとつ取る自動詞であり、「古波陀嬢子を」は「聞え」の主語である。しかし(i)の例は、「古波陀嬢子を」は主文の動詞「枕まく」(手枕にする)の目的語と捉えることも可能である。構造的にはこのような文では従属節の主語には音形のない pro が存在する。ヲが単文中の主語を表示する例は皆無であり、上

代日本語のヲは絶対格(非対格)ではなく、対格であり、目的語を表示する(「ヲ+ミ」語法に関しては、蔦(2005)参考)。なお、活格型の言語にも形態的対格表示をもつ言語が多く存在することは後述する。

## 電子テキスト

The Oxford Corpus of Old Japanese, <http://vsarpj.orinst.ox.ac.uk/corpus/>  
万葉集検索システム(山口大学) [http://infux03.inf.edu.yamaguchi-u.ac.jp/~manyou/ver2\\_2/manyou.php](http://infux03.inf.edu.yamaguchi-u.ac.jp/~manyou/ver2_2/manyou.php)

## 参考文献

- 池田幸恵(1996)「宣命の「を」格表示」『待兼山論叢』30号19-32.  
倉野憲司、武田祐吉(1958)『古事記祝詞』日本古典文学大系(岩波書店)  
北川和秀(1982)『続日本紀宣命 校本・総索引』(吉川弘文館)  
金水敏(2011)「統語論」『文法史』金水敏、高山善行、衣畑智秀、岡崎友子篇、77-166頁(岩波書店)  
小谷博泰(1986)『木簡と宣命の国語学的研究』(和泉書院)  
次田潤(2008)『新版祝詞新講』(戎光祥出版)  
竹内史郎(2008)「古代日本語の格助詞ヲの標示域とその変化」『国語と国文学』50-63.  
蔦清行(2005)「ミの世界」『国語国文』73:12, 10-28  
野村剛史(1993)「上代語のノとガについて」『国語国文』62:2. 1-17.  
柳田優子(2007)「上代語の能格性について」『日本語の主文現象』長谷川信子編、147-188.(ひつじ書房)  
Baker, M., C. (1988) *Incorporation*. Chicago: The University of Chicago Press.  
de Hoop, H. and P. de Swart.(2009) *Differential subject marking*, Springer. The Netherlands.  
Dixon, R.M.W. (1994) *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.  
Frellesvig, B., S., Horn, Y. Yanagida (2014) Differential object marking in Old Japanese: A corpus based study. to appear in *Historical Linguistics*, John Benjamins.  
Harris, A. C. and L. Campbell (1995) *Historical syntax in cross-linguistic perspective*. Cambridge: Cambridge University Press.  
Kornfilt, J. (2003) Subject case in Turkish nominalized clauses. In *Syntactic structures and morphological information*, ed. by Uwe Junghanns and Luka Szusich, 130-214. Berlin: Mouton de Gruyter.  
Mohanan, T. (1990) *Argument structure in Hindi*. Stanford: CSLI Publications.  
Motohashi, T. (1989) *Case theory and the history of the Japanese language*, PhD dissertation, University of Arizona.  
Pesetsky, D. (1987) Wh-in-situ: movement and unselective binding. *The representation of (in)definiteness*. ed. by E.J. Reuland and A.ter Meulen 98-129. Cambridge. MIT Press.  
Silverstein, M. (1976) Hierarchy of features and ergativity. In *Grammatical categories in Australian languages*, ed. by R.M.W. Dixon, 112-171. Canberra:

Australian Institute of Aboriginal Studies.

Vovin, A. (1997) On the syntactic typology of Old Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 6, 273-290.

Woolford, E. (1997) Four-way case systems: ergative, nominative, objective, and accusative. *Natural Language and Linguistic Theory* 15: 181-227.

Wrona, J. and B. Frellesvig (2010) The Old Japanese case system: The function of *wo*. *Japanese/Korean Linguistics* 17, ed by S. Iwasaki, H. Hoji, P. M. Clancy and S. Sohn, 565-580. Stanford: CSLI Publications.

Yanagida, Y. (2006) Word order and clause structure in Early Old Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 15: 37-68.

Yanagida, Y and J. Whitman (2009) Alignment and word order in Old Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 18, 101-144.

(柳田優子・ やなぎだゆうこ・筑波大学)